



卒業・進学・就職、おめでとうございます。
新たな門出が皆様のより良い未来への
扉となりますように。

■ ■ ■ 今号のおもな記事 ■ ■ ■

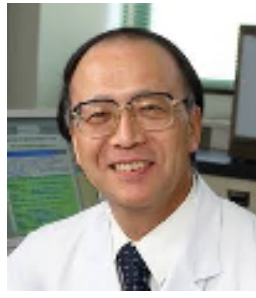
- ・講演会予告
- ・訃報
- ・教養講座要旨
- ・エッセイ
- ・シンポジウム報告
- ・研究部会報告

公開講演会・予告

腰痛を解く心のナゾ

丹羽真一先生

福島県立医大
会津医療センター
特任教授、
福島県立医大名誉教授。



2015年6月6日(土) 15:00-17:00 (開場14:30)

早大戸山キャンパス36号館・3階・382教室
対象:学生、大学院生、一般*参加費無料

就活セミナー・予告

なるほど!の就活

~“ありきたり”の先へ~

—面接・履歴書中心の実習とQ&A—

小林源先生

産業カウンセラー、
キャリア・コンサル
タント、キャリア教
育アドバイザー、
当学会副会長。



2015年4月25日(土)14:00-16:00(開場13:30)

早大戸山キャンパス39号館・5階・第5会議室
対象:真の就活をしたい卒業見込、既卒の人。
*参加費無料

訃報



浅井邦二先生(早稲田大学名誉教授)

浅井邦二先生が2014年12月17日に逝去
されました。(享年90歳)

先生は、早稲田大学文学部哲学科心理
学専修を卒業され、人事院を経て、早稲
田大学文学部、及び人間科学部で教員と
して学生の研究指導をされながら、大学・
学部の要職に就いて大学運営にも深く関
わりました。1987年の人間科学部開設に
際し、準備室長として尽力し、初代人間科
学部学部長として文学部から移籍しました。

早稲田大学心理学会設立にも尽力され、
昭和40-50年代の学会活動を支えられま
した。生粋の早稲田マンとして、大学野球
やラグビーのスポーツを欠かさず見るよ
うに早稲田大学への熱いものを秘めていま
した。退職に際しても早稲田大学に教育
基金として多額の寄付をされました。

実生活全般では、他者に迷惑をかけな
いで生きることを実践し、自分の最後のこ
とまで考えて行動された先生でした。

オーストリアの精神科医ヴィクトール・フ
ランクルの言葉を座右の銘として実存的
精神を実践する方でもありました。

教養講座 要旨

第17回教養講座 2014年 12月 6日

からだでこころをマネジメントする： 身体心理学の理論と実践

Bodily approach to the management of mind:
Theory and Practice of Somatic Psychology

湯川進太郎

筑波大学 人間系 准教授

博士(心理学) 筑波大学

空手家・パントマイミスト・太極拳家



さまよう心

他の種には(ほぼ)見られない我々人類の特徴は、メンタルタイムトラベルができることと心の理論を持つことである。心の中で過去にも未来にも飛べる我々人類は、あらゆる種の中で唯一、起こったことを反すうし、まだ起こっていないことを心配する。加えて他人の気持ちも気になる。限られた情報からかなり具体的な相手の心情を事細かに推測する。こうしてメンタルタイムトラベルと心の理論を有するために、我々の心はあちこちにさまようことが宿命づけられている。

こうした心のさまよい(マインドワンダリング)は脳のデフォルトモードであり、脳が休んでいるときに起こる。何かに没頭していたり注意や警戒をしていたりすればさまよいにくいけれども、気を抜いたりぼーっとしていたり簡単な作業をしていたりすると、いつの間にか勝手に心はさまよい出す。こうしてついさまようと、過去を反すうし未来を心配する。反すうや心配といった反復思考はやがて、抑うつや不安といったネガティブな感情状態を導く。そしてネガティブな感情状態は、マインドワンダリングをもたらしやすいとする。すると当然、ますます反復思考しやすくなる。私たちの意識はこのように、悪循環に陥りやすい癖を持っている。

悪循環からの脱出

この悪循環から抜け出すにはどうすれば良いか。最初に思いつく方法として、思考抑制がある。つまり、つい考えてしまうのだから、だったら考えないようにすればよい、という発想である。しかしこれはことごとく失敗に終わる。思考や感情は、考えないようにしようとすればするほど考えてしまう。これをリバウンド効果という。一度試してみると良い。例えば今から30秒間、「シロクマ」について考えないようにしてみれば、すぐに実感できる。

もちろん、代替思考(別のことを考える)や気晴らし(別の何かに没頭する)という方略も短期的には効力を発揮する。しかし残念ながらこれらの効き目は一時的であり、やがてまた感情や思考は侵入し、気が滅入り、心がさまよい始める。

筆記開示

こうした反復思考(反すうや心配)に対処するためのより効果的な方法として、筆記開示法というものがある。これは要するに、気に掛かっている感情や思考を文字に書き起こす(言語化する)という方法である。経験を言語化するためには、その経験に直面し、自身の感情や思考をモニタリングし、それなりに意味のある言語へと文章化する必要がある。つまり、「書く」という行為は、直面・気づき・統合といった、認知行動療法の治療的要素と似たような構造になっているのである。

筆記開示法は、心に引っかかっている(負荷をかけている)特定の経験に対してはそれなりに効果をもたらす。しかし一方で、こうした対症療法的なアプローチではなく、生活全体を底上げ(改善)していくような、より根本的なアプローチないのだろうか。つまり、対症療法的なアプローチには、効いている内は良いがその繰り返しにいずれ限界が訪れるかもしれないからである。その一つが、マインドフルネスである。



マインドフルネス

マインドフルネスは、「今ここに、価値判断せず、能動的に注意を向け続ける(気づいた状態を維持すること)」といったような意味合いの概念である。本来は**仏教**用語であり、したがって仏教的にはもう少し深く広い意味があるけれども、とりあえず、心理学的にはこのように定義される。このマインドフルネスによって、より効果的に、意識の悪循環から抜け出すことができる。感情や思考への囚われから解放される、感情や思考を手放すことがマインドフルネスの真骨頂だからである。

ただし、このマインドフルネスは一朝一夕でできるものではない。マインドフルになるためには、またマインドフルでい続けるためには、定期的継続的な練習が必要である。いわば漢方薬に例えられるかもしれない。最も端的な練習方法は、**只管打坐**の坐禅である。とりあえず手始めに当面は、静かに坐って自分の**呼吸**に集中する。心がさまよったら(マインドワンダーしたら)、再び呼吸に注意を戻す。ただそれだけである。ここでの意識体験を、日常生活での体験に応用していく。すると、以前に比べて感情や思考に気がつくようになり、それらに囚われなくなる。そうやって少しずつ、日々をマインドフルに過ごすようにしていく。

「道」と身体技法



こうした坐禅のような瞑想エクササイズとほぼ同じことをしているのが、古来日本に伝わる「道」と呼ばれるものの数々である。

それは、茶道であり華道であり書道であり、そして本来の意味でのあらゆる**武道**と呼ばれるものである(なお、競技中心の現代柔道や現代剣道は完全にスポーツであり、残念ながら「道」とはいいがたい)。



禅的な態度とはすなわちマインドフルネスであり、「道」と呼ばれる活動はいずれも本来、マインドフルネス訓練そのものであるといえる。

この辺りの続きについては、是非拙著『空手と禅』(BABジャパン)をご覧ください。

また、古来中国に伝わる武術由来の身体技法(**太極拳**や**気功**)も、質的には同じようなエクササイズになっている。なお、こちらは**道教**系であり、**仏教**系の瞑想エクササイズよりもより身体重視、もつといえ、身体の「健康」重視である。



この辺りの続きについては、是非拙訳『タオ・ストレス低減法』(北大路書房)をご覧ください。

筆者は**空手**家であるため、**仏教**系のマインドフルネスの観点から**武道**を解きつつ、これを援用して**道教**系の**太極拳**や**気功**を実践し、最近では、マインドフルネスや**タオ**の心理学を大学の授業などで教えている。それは、**気功**・**瞑想**・**太極拳**・**沖縄空手**といった**東洋**伝統の各種身体技法が、感情制御と**ストレス**マネジメントを介して、心身の健康や**ウェルビーイング**の増進へと結びつく「道」でもある。



私が学生生活から今まで学んだ事

医療法人社団 風鳴会 成城墨岡クリニック
 デイ케어 ゼロ次元
 精神保健福祉士 西山 竜司
 (第二文学部 社会・人間系専修 2004年3月卒業)

皆さん、こんにちは、初めまして。私は在学中、木村先生、石井先生、五十嵐先生をはじめ多くの先生方ご担当の心理学授業を受講していました。

しかしながら1年留年をしたり、卒業論文は締め切り間近にパソコンがウイルスにかかりデータが半分以上消えたり、臨床心理士を目指しての大学院試験は試験前に謎の高熱で倒れて試験自体を受けずじまいになったり、レク「町田リス園」にて



ともかくにもお恥ずかしいエピソードは枚挙にいとまが無く、醜態を晒すだけになるのは目に見えていて、何を取り上げて良いものやら悩みました。それでも、卒業論文に明け暮れた学生生活の最後から現職に辿りつくまでの自分を振り返れる良い機会を頂けたと思ひ直し、とりあえず筆をとることにいたします。

卒業論文のテーマは『自己愛人格傾向とコーピングと攻撃性の関連についての研究』でした。自己愛人格の持つ要因を中心に、ストレス・コーピング、攻撃性といった心理的傾向との関連について微力ながら考察を試みてみました。社会は文化を形成し、文化を個人の中に人格という形の中に再生産する。そうしたことから当時の現代社会の自由な価値観的文化を表した人格像とは自己愛的人格であり、その自己愛的人格の特徴を検討することは今日の日本の状況を紐解いていくことに繋がりはしないか、と考えたからでした。方法として、心理学的尺度を用いて量的統計によって導き出すものと、投影法であるP-Fスタディを併用しました。量的なものとの組み合わせることにとっても苦心したことを思い出します。心理学教室の先生方、同じゼミの方々や卒論指導の乙部先生に支えられ、充実した最終学年を過ごすことができました。

そんな私でしたが、身も心もフラフラしながらも卒業して実家に帰り、家業を手伝っていました。家業は自動車教習所で、初めは事務員をしながら指導員を目指していました。無事に指導員となった後は、免許取得の為に多くの方の教習をしていました。最初は単に仕事として見送っていた卒業生が、いつしか試験に合格し運転免許を手にした満面の笑みを見ると、「ああ、良かったな。」と心から思えるようになっていきました。人が喜んでる姿に、そしてそこに少しでも役に立てた自分の役割に、共に同じ目的に向かって達成した事に。一人ひとりに接する期間は短く、小さなことかもしれませんが、共に過ごす中で失敗する苦悩や不安、成長する喜び、そうした気持ちを共有できる幸せを積み重ねていく内に、私の中で変化していったものでした。

その後、再び上京し精神保健福祉士の国家資格を取得したのち、現在精神科クリニックのデイケアと作業所の異なる二つの場所で働かせて



職場にて

て頂いています。精神科クリニックのデイケアでは集団療法としてグループを支えながら日頃、精神疾患や障がいをお持ちの方と共に多くのプログラムを行っています。多彩なプログラムを通じ、スタッフやメンバーという役割を時には超えて、人として同じ地平に立って共に考え、悩み、喜び、そして新しい自分に気づき学び、次のステップへと挑戦するという事を大切に取り組んでいます。作業所では、公園清掃と自主生産品として手作り石けん作りを行っています。これらの生産活動だけではなく、毎日の調理や通所される方が色々な目的やペースで利用、活動のできる場所を提供しようと工夫しています。

通所される方から求められる内容や役割は違いますが、どちらの場でも共通して大切にしていることは、まずは通所される方が安心できる安全な場を提供すること、目の前の方と共にその時自分ができていることに全力を尽くすことのように思えます。まだまだ勉強不足で、その時に自分ができていることに限界があつてご迷惑をおかけする時がありますが、周りの先輩スタッフの方に毎日助けられながら日々精進しています。

こうして現職まで辿りついた訳ですが、私が早稲田大学で学んだ全てが今でも根底にあります。それは人と人が支えあって生きているという喜び、何があってもへこたれない気持ちと、何かを知ろうとする時に苦心をいとわない探究心です。



今から帰ります

これからも、その方らしさを共に考え大切にしながら、その方がその方らしく居られ、そして共に生きていける社会とは、と探求しながらへこたれず、おそらく非力な私ですが尽力していきたいと思えます。

紆余曲折の人生が花開くとき



(株)キャリア・パートナー代表取締役
菊本 奈々
(第一文学部心理学専修1991年卒)

私は9年前に独立起業して、現在はキャリアコンサルタントとして大学生のキャリア支援しております。早稲田のキャリアセンターでも石井先生のご紹介で、数年前から毎年自己分析講座を担当しているので、読者の中には私と面識のある方もいらっしゃるかもしれません。今でこそ学生のキャリア支援にかかわることが、一生のライフワークだと自負しておりますが、ここまでのキャリアには多くの紆余曲折がありました。

【相次ぐ身内の死と乳がんの宣告】

私の人生の大きな「地殻変動」は40代の時に相次いでおきました。一つは、弟と母の死を経験したこと、もう一つは自身が乳がんを宣告されたことです。

大学卒業後、第一志望の大手化粧品メーカー商品開発部に配属されたものの、半年で退社。その後、事務職、営業職と転職をし、結婚も離婚も経験しました。20代の私は人生の羅針盤を完全に見失っている状態でした。30歳の時に転職した大手人材会社で初めて仕事のやりがいを感じ、人と仕事をマッチングするコーディネーターという仕事が私の天職だ！とようやく自分の「居場所」を見つけた気になり(実は仮の居場所だった)、毎日終電まで仕事に明け暮れる日々を送っていました。それから、自分の会社を作りたいと考えるようになり、37歳で自分の会社を作って独立したのです。



留学生就職支援セミナー

起業して2年位は人材紹介バブルもあって順調でしたが、世の中そう甘くはありません。リーマンショックの大打撃を受けて人材紹介は売上がほとんどゼロになり、追い討ちを掛けるように2010年3月に弟が同年6月に母が亡くなりました。何もやりたいことが出来ず末期癌で亡くなった母や、突然の心肺停止で他界してしまった弟を見て、自分の人生も有限であることを改めて痛感しました。「自分は人生を無駄に生きていないか?」「自分が本当にやりたいことは何か?」を自問自答する日々が続きました。そんな状況の中でも、大学でのキャリア支援の仕事の頂くようになりました。学生たちのキャリア支援を経験する中で、人材紹介を続けるよりも、これからの日本の未来を背負って立つ大学生と向き合っていくことの方が、自分にとって大切なことに思え、やりがいも感じられると考えるようになったのでした。そしてもっとキャリアデザインをアカデミックに学びたいと大学院への進学を決意したのです。

しかし、大学院に入学した矢先の2014年9月に、今度は自分自身が乳がんの告知を受けました。母が胃がんで亡くなったことを目の当たりにしていた私には「癌＝死」が浮かび、目の前が真っ暗になったことは言うまでもありません。そんな時も周りの皆さんが支えてくれたお蔭で、仕事・大学院・治療という三足のわらじを履く生活を何とか乗り越えることが出来ました。入院手術よりも放射線治療で毎日通院しなくては行けないことが、本当に大変でした。でもこの辛い経験が、キャリアカウンセリング時のクライアントへの共感値を高めていると今は前向きにとらえています。社会に出て経験する紆余曲折の先には、きっと花が開く時が待っていると思います。どんな経験も糧となると信じて前向きに生きて欲しいと伝えることが、私のキャリアコンサルタントとしての使命だと考えています。

【料理を通じて学生のライフキャリアを支援する】

キャリアカウンセリングを通じて、ここ数年は、自尊感情が低い学生が多いことに問題意識を持つようになりました。そんな学生たちに、自分の趣味でもある「料理」を勧め



料理サークルの様子

なぜなら、料理は学力も体力も関係なく誰でも取り組める上に、作り上げる達成感を得ることが出来、更に「美味しいね！」と言われることで承認欲求も満たされるからです。料理ができるようになると自分に自信が付き、家族や周りとの関係が好転していく学生を何人も見てきました。私の料理は全くの自己流ですが、現在、二つの大学で料理サークルの活動を支援しています。学生のライフキャリアの充実のためにも、そして将来、仕事と家事の両立に苦労しない為にも「料理」を楽しみながらできる学生が増えるように、この活動を修論の研究テーマにも取り入れています。キャリア支援と並んで、料理を通じて学生のライフキャリアを支援することも今後のライフワークとしていきたい所存です。

都市と故郷をつなぐ

(株)まちづくり小浜 おばま観光局
取締役企画経営部長

朝倉 昌也

(第一文学部心理学専攻1979年3月卒業)



秋のマスコミ
キャラバン
(ラジオ出演)

私は、広告代理店博報堂にて、各種企業の広告販促計画、商品開発や、企業のPR施設、文化・スポーツ施設、イベント・博覧会・展示会、全国の観光・まちづくりなどの事業開発に携わっていました。日本各地や世界各国を飛び回る日々。世界各国の良さを知れば知るほど、日本や田舎の素晴らしさにも魅せられていきました。生まれ故郷の父がなくなったのを契機に、15年くらい前から故郷のまちづくりも始めました。都市生活の快適さもいいのですが、今という地方創生をやらないと日本は辛くなるなあという思いの方が、加齢とともに増してきました。無謀にも48歳の時に早期退職をして、今では妻子の迷惑を顧みず関東に残したまま、単身故郷のまちづくりに没頭しています。

故郷とはOBAMAさんやNHK朝の連続TV小説「ちりとてちん」で少し有名になった福井県小浜市という人口3万人の小さな町。

京阪神の方には少し知られていますが、関東の方にはどこにあるかもわからない町です。朝鮮半島の方から地図で日本を眺めてみてください。



小浜湾の夕景

一番近いのは九州ですが、対馬海峡を、対馬暖流に乗って進むと京に入るのに便利なのが若狭湾だというのがわかります。この若狭湾の中央に小浜はあります。



神宮寺・鶴ノ瀬のお水送り

3月2日は、小浜神宮寺・鶴ノ瀬の「お水送り」です。春を呼ぶ神事で、3月12日の奈良東大寺二月堂若狭井から汲み上げる「お水取り」の水を送ります。

シンポジウム報告

律令時代から小浜は大陸の仏教、文化、物資を運ぶシルクロードの港として、また淡路、志摩と共に御食国(みけつくに=御食を貢ぐ国)として、京とつながっていました。小浜、京都、奈良、熊野が南北に一直線でつながっているのもうなずけます。

京の台所、錦市場に行くと現代でも若狭ぐじ=甘鯛、若狭がれい、小鯛の笹漬けなど小浜からの魚が並んでいます。これらは鯖とともに鯖街道によって運ばれ、京野菜と出会い和食文化が花開いたのです。

若狭湾はリアス式海岸ですので、たおやかな自然、海、夕日が美しいところです。古い町並みや国宝・重文も数多く、神仏混淆文化が残り、日本の塗箸生産の大半を占める若狭塗箸など見所も豊富です。

小浜は全国に先駆けて食のまちづくり条例を制定した食育、食文化を推進する町でもあり、今年のミラノ博にも出展します。

私は、「温故創新」と呼んでいますが、古き良き日本の文化や食を大切にしながら、現代に役に立つ「食、祭、文化、さとうみ体験」を企画開発し、都市と小浜の人をつなぐまちづくりを行っています。



鯖寿司づくり体験



秋の精進料理づくり体験

若狭塗箸研ぎ出し体験、鯖寿司づくり体験、鯖寿司食べ比べクーポン、語り部とまち歩き・小浜ぶらり、若狭の秘仏特別公開などが人気です。

これからは日本に訪れる外国のお客様にも来ていただくと考えています。

小浜の農林水産業や観光・まちづくりに携わる人々と連携し、自らも道の駅「若狭おばま」を運営したり、自社農園で果樹・野菜を育てながら、食や観光商品を協同開発し、都市の広告会社やメディアなどのネットワークを駆使して、情報発信を推進しています。

日本のそして世界の人々に現代に生きる活力や癒しを提供し、地方から日本を元気にするお役に立てればと、残された人生を捧げることにしています。是非一度、若狭おばまにお出かけください。

早大文学学術院(総合人文科学研究センター)「行動・社会・文化に関する多角的アプローチ」部門の主催で、「人間関係の生涯発達心理学」の出版記念シンポジウムが開催されました。早稲田大学心理学会が協賛しました。

《出版記念シンポジウム》

「人間関係の生涯発達心理学—自己／他者／意味との出会い」

【協賛】丸善出版株式会社・早稲田大学心理学会

人間に固有な心の世界を、自己／他者／意味が発現し、それらが豊かな表象活動をとおして分化統合され続ける世界としてとらえ、4つの発達期に出現する人間関係を生涯発達の視点から検討した。



日時:2014年10月11日(土)13:00-15:30

場所:早稲田大学文学学術院

(戸山キャンパス)36号館6階 682教室

司会:大藪 泰(早稲田大学文化構想学部)

発表:

1. 大藪 泰「乳児が意味世界に出会うとき」
2. 林もも子(立教大学現代心理学部)
「思春期の始まりにおける孤独の意味」
3. 小塩真司(早稲田大学文化構想学部)
「青年から成人へ
—人間関係や自己の広がりと変化—」
4. 福川康之(早稲田大学文学部)
「ライフサイクルにおける老年期の機能と適応」

大藪メモ:

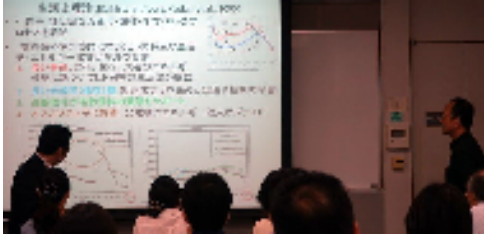
人間は、個としての生命を生き、関係としての生活を生きる。人間の一生は、主体としての自己の実現と他者とのよき関係を統合させ、そこに自分らしい意味の世界を構築し続けてゆくことである。他者が構築してきた意味世界に生まれ出た乳児は、その意味とどのように出会うのだろうか。人の乳児に豊かに備わる情動の働きを立脚点にし、共同注意の視点からこの問題を論じた。

林メモ:

小学校高学年になると、多くの子どもは自分や家族をはじめとする身近な環境を大きな世界の一部として相対的に見る視点を獲得する。自己を他者の視点から見たとき、子どもと世界との間に深いところで裂け目ができ、子どもは世界を冷ややかにあるいは恐れをもって見わたすと同時に孤独を体験する。思春期の苦しみと成長を、孤独を否認や昇華などにより避けようとする必死の試みという視点から論じた。

小塩メモ:

青年期から成人期にかけて、それまでよりもさらに一層、人びとと社会との関わりは大きくなり、人間関係も広く展開するようになる。就職や結婚、子育てというライフコースの道筋は、一定の人間関係、自己意識、パーソナリティの変化を生み出す。同時に、その道筋は個々人によって多様なものとなり、個人差も大きくなる。ここでは、このような青年期以降の共通性と多様性について考えてみた。



福川メモ:

「老化」は多くの生物に認められる現象であるが、ライフサイクルに「老年期」を有する生物は稀である。今回は、ヒトのライフサイクルにおける老年期の機能について、生活史理論や世代間交流の観点から考え、特に、「祖母仮説」に関する国内外の研究知見の概観を通じて、ヒトの長寿化の進化的適応の可能性を検討した。

研究部会報告

精神生理研究部会・第68回研究会

日時 : 2015年3月13日(金) 16:00-17:45

場所 : スポーツ科学部570実験室

日常的なポジティブイベントの継続的
筆記が楽観性と悲観性に及ぼす効果

本多麻子(東京成徳大学応用心理学部
健康・スポーツ心理学科)

【要旨】

悲観主義者と比較して、楽観主義者は心身の健康状態がよく、あらゆるパフォーマンスが高い。

拡張-形成理論(Fredrickson, 2001)によると、ポジティブ感情を経験すると創造性が高まり、視野が広がり、健康状態も優れ、よい変化をもたらす。また、ポジティブティはネガティブティの3倍を超えた場合に繁栄をもたらす分岐点となる。

本研究では大学生312名を対象として、週1回、15週間にわたり「24時間以内(あるいはこの数日)にhappyだったできごと」の自由記述を求めた。日常的なポジティブイベントの構成内容の解明と、楽観性、悲観性、およびポジティブティとネガティブティの割合(ポジティブティ比)の変容を検討した。1回目と15回目の調査時に質問紙によって楽観性、悲観性、ポジティブティ比を評価した。各回の記述内容についてテキストマイニングを実施し、出現した語句のクラスター分析と共起ネットワークを求めた。

その結果、ポジティブイベントの筆記実施前と比較して、15週間の筆記実施後に悲観性得点は低下し、楽観性得点は増加傾向であったことから、ポジティブイベントの継続的筆記は悲観性の低減と楽観性の増加という思考の変容をもたらした。

大学生の日常的なポジティブイベントは、友人を中心とした人間関係に関連した内容と、食事や睡眠などの生理的欲求を満たす内容が多く、15週間を通じてほぼ一貫していたことが明らかになった。

発行元: 早稲田大学心理学会

〒162-8644 新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部心理学教室内

電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759

担当: 石井康智

メール: waseda_shinri@yahoo.co.jp

担当: 朝岡美好

書類発送元:

一般社団法人学会支援機構

〒112-0012 文京区大塚5-3-13

小石川アーバン4F

電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

早稲田大学心理学会ホームページ:

<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>